

氏名	いけ だ けい こ 池 田 敬 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 447 号
学位授与の日付	平 成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	軍記と室町物語

論文調査委員 (主 査)
教授 日野龍夫 教授 木田章義 助教授 大谷雅夫

論 文 内 容 の 要 旨

中世文学に一大ジャンルを形成している軍記は、複雑な諸本の問題をはらむものが多く、特に『平家物語』諸本の問題は研究史を通じて最重要課題であり続けている。しかし、諸本の先後の問題や系統研究のみならず、異本編集者が意図した物語世界の構図を読み解くことは、必ずや文学研究にとって必要であり、またこれまでの研究に資するところも大であろう。また、異本の制作がどのような手続きによって行われたかを本文を通じて分析することは、先後・系統の研究にとっても中世における文学作品制作全般の方法にも関わることでありと思われる。

一方、室町物語（御伽草子）は、南北朝時代から近世前期にかけて大量に生産された短編物語群であるが、ほとんどの作品が先行の作品から何らかの素材や思想的影響を得ており、軍記にその材を仰ぐもの、あるいは素材を共有するものも多数ある。軍記同様異本の問題をもつものも多く、異本の制作方法には軍記の方法と相通じるものがある。室町物語の編集方法の問題の理解は、『平家物語』及び軍記研究と互いに相関するものでありと思われる。

また、異本や編集の問題を考察する中から、当時の価値観・仏教的思潮などの精神史的な解明も可能となると思われる。

このような観点から、本論文は『平家物語』を中心とする軍記研究と室町物語研究をもって構成し、「Ⅰ 覚一本『平家物語』の構図と人物造型」・「Ⅱ 断絶平家型『平家物語』諸本の本文形成」（『保元物語』・『応仁記』研究を含む）・「Ⅲ 室町物語の編集と軍記」の三部からなる。

Ⅰ 覚一本『平家物語』の構図と人物造型

「灌頂巻」を特立する最初の異本である語り物系の覚一本は、読み本系の最も早い成立と目される延慶本の影響下に成りつつ、明確な作品構図を示し周到な語彙選択により登場人物の造型を鮮明にしている。覚一本の読みを確実にすることは、それを指標として他の諸本の意図した世界を解釈することに繋がり、そこに見られる思想、特に仏教的思考方法を汲み上げることが可能となる。主要登場人物を追いながら次の各章で構成する。

○悪行の道程——清盛——

覚一本が作品冒頭の叙述からどのような一貫性をもって物語全体の筋道を作り上げようとしているかを、清盛の人物造型を契機として考察する。清盛は、王法と仏法破滅の「悪行」を行ったことで一族滅亡を招き、仏教の救済をも拒否する徹底的な悪人として造型される。彼の「悪行」とそれに対する「悪報」という背骨が覚一本を貫いている。

○ゆゆしく大様なる人——重盛——

諸本で理想人として描かれる重盛に関して、覚一本の使用語彙に注目して造型意図を論ずる。重盛と頼朝に限って特異性を示す「ゆゆし」の使用箇所の解釈から、ある体制を守る、あるいは作り出した人物の全体像への賛辞として機能すること、さらに重盛にのみ「大様」の語を与えて重盛の理想性を貫徹させたことを明らかにした。

○頼朝の物語

源頼朝の文学的造型の問題を述べる。『平家物語』に欠くべからざる登場人物であるにもかかわらず、彼はいわゆる主人公的ふくらみのある造型は行われず、物語設定の枠組みとして呼称の変遷が利用される存在であり、物語として発展する可

能性のある彼のエピソードも結局は発展しなかったことを、『平家物語』諸本と以後の文学作品の叙述に基づいて論じ、重盛の造型と比較し得るようにした。

○「おとりたるもの」こそ「うたてけれ」——宗盛——

人物像を統一的にとらえにくい宗盛について、表現の細部まで読み込むことで物語構図上の役割を解釈する。清盛・重盛・知盛・重衡・維盛らと比較され劣る人物と造型される。彼に与えられた役割を象徴する語として「劣る」「うたてし」が意識的に使用され、処刑の瞬間に煩惱に立ち戻り仏法の救済からも漏れる造型がなされたのである。

○悪人往生——重衡——

1 優にやさしき人——流布本の造型——

2 悪人往生——覚一本——

流布本と覚一本それぞれの造型の差異を考察し、類似の本文をもつ諸本でも人物造型と物語の構図が相違することを明らかにする。流布本においては、「優にやさしき人」という理想像として造型され、その最期が巻十二冒頭に置かれることで構想上の重要性も高い。が、流布本のキーワードは覚一本には適用できず、覚一本が意図したのは「奈良炎上」という仏法破滅の現場責任者であった悪人の懺悔と往生の物語である。

○心弱き人の往生——維盛——

巻十で入水する維盛の往生の成否を問題とする。覚一本の解釈から進んで、日本の仏教がいかにして、一般の心強からぬ凡夫を救済することができるかとして庶民に浸透する可能性を獲得したかを論じた。覚一本の人物造型を利用しての物語の構図の確立をいうと共に、次論と同様、仏教の庶民化が行われる過程を考察したものである。

○「心のほそき」考——「三人法師」

本論は前論と呼応する問題を取り扱う。室町物語「三人法師」の結びの文章の解釈から仏教がどのように庶民に近付いて行くかを考察したものである。「こころのほそき」という表現を、「細し」の語義と「心ほそし」のかたちでの用例を確認し、室町物語の叙述と対応させることで、仏教が恋を肯定することで包容力を拡大したことを言う。

○女院に課せられしもの——灌頂卷六道譚考——

覚一本が初めて特立した灌頂卷と建礼門院の物語上の役割についての考察。建礼門院の往生叙述の必要性と六道譚の機能を、法語や仏教説話集の叙述に照らし、また物語序章と関連させて考えることで明らかにした。清盛・重盛・宗盛・重衡・維盛らを繋いで作り上げられて来た「諸行無常 是生滅法」の巻十二までの世界が、「生滅滅已 寂滅為楽」の境地に導かれ、覚一本の意図した構図が完成することを示す。

○覚一本の選択——二位尼と二つの遺言——

諸本同文というべき序章に対し、覚一本が「灌頂卷」を立て、女院の往生をもって物語を結ぶ意味、この結びによって物語全体がいかなる読解へ導かれるか、などについて、覚一本の人物造型と使用語彙とから推察される物語の構図を整理しつつ論じ、従来注目されていない二位の尼とその遺言をてがかりに、覚一本が選択した方法・世界を明らかにし、「I」のまとめとする。

II 断絶平家型『平家物語』諸本の本文形成（『保元物語』・『応仁記』研究を含む）

『平家物語』研究は、ある一本の考察のみで物語理解には至り得ず、複数の系統にわたる考察を行うべきである。断絶平家型とも呼ばれる十二巻終止の語り物系諸本の覚一周辺本文と八坂系諸本について取り上げ、覚一本との相違が浮かび上がることを期した。

○平松家本『平家物語』について

覚一本と屋代本の書承の混態を示す覚一周辺本文「平松家本」について、これまでの研究成果を踏まえ編集上の齟齬について述べ、編集者の依った覚一本の種類を限定した。非常に厳格に依拠本文を切り継ぎながら新たな『平家物語』を再編集していく様を追う。

○両足院本『平家物語』本文小考

八坂系四類建仁寺両足院本の本文の性格・特徴を巻五と巻十二の例をあげて述べ、本文形成方法について巻八に焦点を絞り、八坂系諸本間での異同状況から、語り物系諸本間の本文撰取のみならず読み本系、特に延慶本からの撰取を考える必要

があることを述べた。このことは最近八坂系二類本研究においても言われている。

○八坂系諸本における巻十二

八坂系諸本の巻十二の構成の相違を調査考察することにより、十二巻構成を堅持した八坂系諸本が、いかに物語最終巻にふさわしくする努力を行ったかを述べるものである。六代の死が、物語としては効果的に描けないものではあっても、『平家物語』の結びは平家嫡流の死であるべきだという思潮が強固に存在したことを結論とする。

○城一本『平家物語』の本文形成について

本論は、『平家物語』の最後の異本である八坂系城一本の本文を調査し、書承により非常に複雑な過程を経て編集された本文であることを実証したものである。同時にこのような煩雑ともいえる作業を行ってまで新しい『平家物語』を作り出そうとする精神はいかなるものであったか、についても私見を述べた。

*異本の編集者が意図した物語世界の構図を読み解くには、一作品の諸本研究のみならず、異なる作品の異本のありようの考察が、他の作品研究にも資すると思われる。この観点から「Ⅱ」には、同時に『保元物語』と『応仁記』に関する研究をも配した。

○『保元物語』諸本の意図——末尾三章段考——

半井本・金刀比羅本・流布本の末尾を比較し、編集意図と為朝説話の時代による関心の違いを論ずる。崇徳院を描き通すことで保元の乱叙述を完結する金刀比羅本は文学的に高い完成度を示すが、初期の半井本は末尾に為朝についての伝奇的説話を置き、この構成が流布本にまで引き継がれる。これは、江戸時代読本の世界への文学史的展開を用意するもので、軍記の異本は本文の良否の問題に帰結するものではないことを示す。

○「花の洛」と「野馬台詩」——巻本『応仁記』——

冒頭に長大な野馬台詩と注釈を記す一卷本『応仁記』についての、冒頭部の意味の考察。中世における未来記の流行を指摘し、野馬台詩の注釈が室町期に盛んに行われたことを実証した上で、構成との関連からも一卷本『応仁記』は失われた都を追慕する作品であるとし、それは当時から描かれ始めた「洛中洛外図」の思想に通じることを述べた。

○『応仁記』の成立と諸本

『応仁記』研究状況の整理と一卷本の成立について諸説を整理し、諸本の先後を考察し、一卷本作者の意図を鮮明にすることを目指した。『保元物語』とも『平家物語』とも異なる異本というべき「応仁の乱」関係作品のあり方を示し、後期軍記の「私軍記」ともいうべき性格・傾向を明らかにした。

*このように、「Ⅱ」に二群の論を配して「Ⅰ」と対置することで、軍記諸作品の異本のあり方の問題の所在を明らかにすると共に、各伝本の性格・意図・作品の構図の考察が軍記研究にとっては重要であることをも示し得ているだろう。

Ⅲ 室町物語の編集と軍記

軍記と関連を有する室町物語について、軍記同様の異本の問題をも含め作品編集の方法に関わる論を置く。同時に編集に関わった人々の教養・思想と、その時代的变化を知ることもなっている。

○「横笛草紙」本文の流動

『平家物語』巻十の滝口入道と横笛の物語は室町物語にも見える。古写本諸本の本文異同から本文編集の状況を明らかにし、渋川版における「高野の聖」云々部分の脱落事情について古活字本の一本の調査をもとにして考察し、中世諸本に必備であった「高野の聖」についての言及の脱落は、「横笛草紙」がまさに悲恋物語として享受される近世化というべき現象であることを結論した。

○弁慶像の展開——京大本『弁慶物語』——

写本系統の『弁慶物語』のうち、京都大学国語学国文学研究室所蔵本（京大本）を調査し、その特徴を『義経記』や他の弁慶を描く室町物語類と比較検討し、室町物語の異本が編集者の関心のありようと知識によって、様々な異文を生み出す可能性を示唆した。

○「天竺・震旦物語の事」の意味するもの——『太平記』と室町物語の間——

「孝」の問題に関する『太平記』の挿入説話について、作者の本文の表面に示す説話の意義と背後に隠されている別の意図とを、室町物語の言葉をてがかりに読み解く。中国や天竺の説話を積極的に取り込む『太平記』作者が、同時に日本的精

神性をも持っていることを『太平記』を享受する「室町物語」から逆照射する試みである。

○「しゆてん童子」の説話

慶応大学図書館所蔵絵巻は、伊吹山系のサントリー美術館本本文に自由な編集を加えた異本であることを本文比較から論証し、独自説話の出典調査から編集者の知識・教養の範囲を考える。室町物語の異本編集は同時代の多くのジャンルの作品から発想・表現を得ていること、特定時期の出版物による文辞など、編者の属した文化圏・時代を強く反映する可能性があることを示した。室町末期から江戸初期の室町物語の『太平記』享受をもあわせ示唆した。

以上、三部はそれぞれ異なる目的を持つ論によって構成されているが、すべてが広くは異本の性格と編集方法の考察という点で一貫性を持ち、編集に関わる人々がもとにした作品をいかに解釈することで新たな異本を作り出したかを論じていると考える。それは即ち彼らの知識教養と思想という中世の精神史を見出す試みでもあるのである。

論文審査の結果の要旨

平家物語は、様々に語られ、書写を重ねてきた結果として、極めて多くの異本が存在する。過去三十年ほどの平家物語研究は、それら多くの諸本の対比検討を通して、作品の原態・古態を解明しようとする方向が主流を占めてきた。その動きの中では、語り物系よりは読み本系が重んぜられ、特に故赤松俊秀氏が延慶本の古態性について説得力のある主張を展開して以来、研究者の多くが延慶本研究に傾いた。しかし、既に失われた、あるいは存在の不確かな「原『平家物語』」を求める原態論は所詮行き詰まる宿命にある議論であり、古態論も、現存本文がすべて南北朝期以後に編集されたものである以上、状況証拠で論ずる他なく、四半世紀を経た現在、原態論・古態論ともに完全に袋小路に入ってしまったかに見受けられる。また、こうした傾向の中では諸本の成立過程にもっぱら関心が向けられ、諸本の本文についての、文学としての読みはなおざりにされてきた感がある。

本論文の論者は、平家物語の一つの完成形態を示すテキストと認められながら、語り物系であるがゆえにおおむねの研究者に軽視されてきた覚一本にもっぱら関心を向け、本文の表現にこだわって覚一本の作り上げた世界を理解しようと試みるという、従来の研究の主流とは異なる立場を堅持してきた。諸本論・成立論がある種の破綻をみた現在にあっては、作品をまず文学として読むという自覚の上に立った本論文は、平家物語研究を文学研究の本道に引き戻すという意義を認めることができる。

論者は登場人物の造型のされ方を覚一本の表現に即して理解することで、覚一本の構図を見出そうと試みるが、特に仏法という視座に立つ。平家物語の仏教性については、宗派の教学の内部にまで立ち入った議論がなされることがあるが、論者は宗派性には関心を寄せず、庶民レベルに浸透した浄土思想・往生思想という観点から、序章から灌頂巻までを貫く仏法の論理を抽出しようとする。その試みはかなりの程度成功していると評価しうる。

論者が採る具体的な方法は、第一に、人物造型のキーワードを見出し、諸本を比較することと、仏典や説話集などの諸文献を調査してその語の語義を検討することを通して、覚一本がその人物に与えた評価、ひいては作品の構図を考察することである。

たとえば「悪行の道程——清盛——」は、「悪行」という形容がほとんど清盛に限って用いられることに着目し、悪行の内容が初めは王法破滅（王権への侵犯）のみであったのが、次第に仏法破滅をも描くようになってゆくことを論じて、覚一本の構図の転換を読みとる。また当時の他の文献に徴して、悪行には「報」が付随するという観念の存在を明らかにして、覚一本平家物語は悪行とその報という因果律の自覚の上に立って、前半は清盛の悪行を描き、後半はその報としての平家物語一門の衰微・滅亡を描いていると論ずる。物語冒頭にいう有名な「盛者必衰のことわり」の内実を丹念に解き明かして、きわめて説得力に富む。

方法の第二は、人物の言動あるいは運命の叙述について、他本や、説話集中の類話と対比して、覚一本の叙述が持つ意味を解釈することである。

たとえば、「心弱き人の往生——維盛——」は、妻子への愛執の思いを断ち切れないうまに入水した維盛は、果たして浄土に往生できたのかという問題設定の元に、妄執と往生との関係を論ずる仏書や説話集を博捜し、また平家物語諸本の叙述に立ち返って精密に吟味し、維盛入水説話が、妄執を断ち切れぬ心弱き中世の凡夫たちの、救済への願望を吸収しつつ語ら

れてきた様相を述べる。斬新な問題設定といい，周到な論証といい，間然するところのない説得力がある。

ただ，方法意識が強すぎるあまり，先に方法があって人物を強引にそれに当てはめている，と評せざるを得ない議論が時に見出されることを指摘しておきたい。

本論文には，平家物語以外に，室町物語（御伽草子）に関する論考が四編含まれる。論者のこの方面の研究は緒に就いたばかりであって，まちまちなテーマははまだ研究に体系性が備わっていないことを示している。ただいずれも軍記とのつながりが強い作品を取り上げており，既存の物語が脚色・増補され，また異本を生み出してゆく過程を考えるという，関心の大きな方向性は看取されるようである。論者のさらなる精進を期待したい。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成15年3月4日，調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。